カナダ・メソヂスト・ミッションと明治の思想家達

津田塾大学教授　馬場伸也

(一)明治期におけるキリスト教の役割

キリスト教（特にプロテスタント）は、旧来の封建的秩序と権威を打破し、近代市民精神と倫理を日本の土壌に植えつけることによって、明治期における新社会の礎を築くのに大なる役割を果した。キリスト教が、日本の近代化のために真の推進力となり得たのは、のちに発展してきた社会主義と共に、根本的な「価値転換」を志向し、封建社会とその倫理に対する「否定の論理」を内包していたからである。また、キリスト教は、こうした社会変革をもたらすに至った多くの偉大な指導者をも生みだした。その中に、カナダ・メソヂスト・ミッションから影響を受けて受洗した人達がかなりいたことは、注目にあたいする。

実際、日本における初期のプロテスタント宣教は、アメリカのピューリタニズムとイギリスのアングリカニズムと、そしてカナダのメソディズムという三本の柱で支えられた鼎を構成していた、といってもさしつかえない。にもかかわらず、キリスト教史の研究では前二者に重きがおかれ、カナダ・メソヂスト・ミッションが果した役割については意外と知られていない。そこで、ここに、明治期における若干の思想家とカナダ・メソヂスト・ミッションの出逢いを紹介してみようと思う。

(二)二人の宣教師の来日

カナダ・メソヂスト教会伝道局が、ジョージ・カックラン（George Cochran 1834−1901）とデービッドソン・マクドナルド（Davidson McDonald 1837−1905）の二人の宣教師を日本に派遣したのは、「切支丹邪宗門ハ堅ク禁制」の高札が撤去されて間もない、一八七三（明治六）年のことであった。これはカナダが独自で外国伝道を開始した嚆矢の出来事である。六月三〇日、横浜に上陸した二人の宣教師は、しばらくそこに滞在した後、やがてカックランは東京に、マクドナルドは静岡に転出した。尚、彼等の転出にあたっては、明治の偉大な啓蒙政治家・勝海舟や東京都知事・大久保一翁（いずれも徳川家臣で静岡出身）らの尽力によるところ大であった（当時はまだ外国人居留地外でのキリスト教伝道は認められていなかった）。

そしてカックランは、中村正直、平岩恒保、横井時雄らを入信に導びき、マクドナルドは日本最初のメソヂスト教会である静岡教会を創立することに成功した。静岡教会からは、山路愛山、高木壬太郎、加藤万治らが輩出した。

(三)まず中村正直について

周知のとおり、中村正直は、福沢諭吉、西村茂樹、西周らと共に明治初期の思想界に君臨した「明六社」の一員であり、スマイルスの『西国立志編』、ミルの『自由之理』等を訳述した人である。これらの著作が、日本の近代化、自由民権思想の発達に偉大な貢献をしたことはいうまでもない。正直は啓蒙思想家として、また「同人社」の経営を通じて教育者としても活躍したわけであるが、その精神的支柱はキリスト教であった（但し、正直は儒教も捨ててはいず、晩年は仏教や神道にも信仰を抱いたようである）。これを最も端的に例証するのに、正直が建白した「擬泰西人上書」（一八七一年末）があげられる。そこには

「陛下如果欲立西教、則宜先自受洗礼、自為教会之主、而億兆唱率焉」

とある。すなわち、日本が本当に西洋の近代文明を導入し、立国を計ろうとするならば、まず天皇自らキリスト教に改宗せよ、というのである。

けれども正直自身、まだその頃はキリスト教には入信していなかった。その彼を宗教的転向に踏み切らせたのがジョージ・カックランだったのである。正直は以前からキリスト教に興味を抱いていたが、トロント市メトロポリタン教会でも「大説教師」として名声を博していたカックランの説教を、七四年、横浜での新年礼拝を聞くにおよんで、非常な感銘を受けた。そこで正直は、まもなくカックランを英語と聖書講義の教師として「同人社」に招くことにした。以来二人の心霊的親交はいよいよ深まり、遂に正直は養子一吉をもうながして、その年のクリスマス、父子ともども〳〵カックランから洗礼を受けたのである。

(四)マクドナルドと静岡教会

王政復古後、駿府（静岡）に退いた徳川氏は、其処に学問所を開設し、諸藩に卒先して、有志の青年達に進取・開化の教育を施し、新日本を背負う指導者を輩出しようと企てた。そこへ、アメリカ人E・W・クラーク（札幌農学校のW・S・クラークとは別人）のあとを受けてやって来たのが、マクドナルド夫妻であった。トロント大学で医学博士の学位をとったマクドナルドは、その学校では、英語のほか理化学、博物学、地理学等を教授するかたわら、自宅では英語聖書の講義を開いた。彼は、日曜日には朝夕二回礼拝説教をすることにしたが、最初の安息日にすでに十七名もの参加者を得た。こうして静岡の地に、はじめてプロテスタント教会の種子が蒔かれたのである。彼は、七四−七八年の満四年間、静岡界隈に居住する唯一人の宣教師として、迫害のなか、伝導に孤軍奮闘した。甲斐あって、その間、彼は百二〇名もの多教にのぼる入信者を得た。これは当時の日本で一番成功した教会の一つであったと思われる。

それには幾つかの要因が作用していた。一つには、旧幕臣の集まる静岡には早くから開国、進取の気風がみなぎっていたこと。薩長閥が跋扈する時代にあって、不遇の旧徳川派の人々のなかには、「文明開化」によって自らの立身出世をも志す者が特に多かったこと。マクドナルドの伝道がまことに献身的であったこと、等がその主な理由としてあげられる。彼はむしろ温厚寡黙で、カックランのように雄弁ではなかったが、その敬虔な信仰にかけては、カックランに優るとも劣らず、礼拝中、神の恵みに対する感謝の気持があふれて、涙で聖書が読めなくなったこともしばしばであった（マクドナルド書簡、在トロント合同教会史料）。

▲デビッドソン・マクドナルド